

映画『食人族』とモンテーニュの食人言説

高岸 敦夫

はじめに

1980年にイタリアで公開されたルッジェロ・デオダート監督の映画『食人族』(*Cannibal Holocaust*)¹⁾はここ十年ほどで再評価が著しい作品である。世界的な大ヒットを飛ばした本作は、日本でも1982年末にステイブン・スピルバーグ監督の『E.T.』とほぼ同時期に公開され、この種の映画としては異例な興行成績を残した。その反面、批評家からの評価は芳しいものではなく、扱いも小さかった²⁾。しかし近年になって、『ブレア・ウィッチ・プロジェクト』や『グラインドハウス』の登場により再び注目されることとなったフェイク・ドキュメンタリーやグラインドハウス映画の代表作として、『食人族』は再評価されることになった³⁾。

本稿ではこのような映画『食人族』を食人言説の観点から論じていきたい。『食人族』は人食い人種の残虐な行為を見世物として描いているだけの低俗な作品として受け止められることが多い。しかし其の实、西洋の知識人が長きにわたって紡いできた食人言説の伝統を踏襲した内容となっている。すなわち異郷の地に住む食人族 (*cannibale*) や野蛮人 (*sauvage*) を引き合いに出して、西洋社会を批判するという手法がこの作品でも使われているのである。このような手法はフランス文学においても枚挙にいとまがないほど見られ、伝統といえるものにまでなっている。本稿ではモンテーニュの『エッセー』(*Les Essais*) に収められている「食人族について」(*Des Cannibales*) をその一例として取り上げて、映画『食人族』との関連性について述べていきたい。また本論の後半では1980年代から今日に至るまでの人類学などの学問上における食人言説の研究

や論争を取り上げるが、ここでとりあげるのは、そこでの議論がモンテーニュらの投げかけた問いかけと連続性を持ったものだからである。ウィリアム・アレンズやクロード・レヴィ＝ストロース、ガナナート・オーバーセーカラら人類学者が残した成果はモンテーニュに見られる知識人の食人言説を補完し、さらにそれを現代世界に生きる我々すべてに対するアクチュアルな議題として提示しているのである。

1. 映画『食人族』とモンテーニュにおける食人族

『食人族』のあらすじを要約すると以下のようなものである。アマゾンの奥地にある「緑の地獄」に取材に行ったドキュメンタリー作家アラン・イエーツら探検隊が行方不明となる。ニューヨーク大学のハロルド・モンロー教授はテレビ局に協力し、彼らの探索のために現地へ赴く。モンロー教授は「緑の地獄」に住むさまざまな部族に接触し、奇妙な風習に直面するが、優秀な同行者に助けられ、うまく立ち振る舞う。そしてモンロー教授らは偶然にも沼族に襲撃を受けている木族を助けることとなるが、木族こそがイエーツらを殺した部族であった。モンロー教授は彼らの死体を発見し、持っていたテープレコーダーと引き換えにフィルム缶の回収に成功する。モンロー教授はアメリカへ帰り、テレビ局で残されたフィルムを視聴することになるが、イエーツらがやらせ映像の専門家であることを知らされる。残されたフィルムに映し出されていた映像はイエーツらの常軌を逸した行動が克明に描かれていた。彼らは部族間の戦争を演出するために現地の女性や子供を小屋に閉じ込めて焼き殺したり、少女を強姦したりするなど数々の残虐非道な振る舞いを行っていた。そして最後には激怒した木族の襲撃にあい、無残に殺される。結局フィルムは廃棄されることとなり、モンロー教授は「本物の人喰いは誰なのだろうか (I wonder who the real cannibals are?)」とつぶやきながらテレビ局を後にする。

こうした内容の『食人族』であるが、この作品はモンテーニュを脚色したものといってもいいほど、モンテーニュの「食人族について」との

間に著しい相関関係が見られる。例えば本橋哲也はモンテーニュについての言及の締めくくりで次のように述べているが、それはいみじくも両者の類似性を表すものとなるであろう。

モンテーニュがここで (…)、ヨーロッパ人によってまさに植民地化されようとしている人々の風俗習慣を尊重しながら差し出しているのは、次のような修辭的疑問だ — 本当の食人種はどちらか、ヨーロッパ人だろうか、それとも新大陸の先住民だろうか？⁴⁾

モンロー教授の台詞と本橋哲也の言葉が示唆するように、『食人族』はモンテーニュの「食人族について」と同じキーコンセプトを持っている。ではそのモンテーニュの作品がいかなるものであるのか、以下で確認していきたい。

モンテーニュが生きた時代において、新大陸（新世界）は人喰いの習慣を持った野蛮人が住む場所と信じられ恐れられていたが、一方で多くの知識人たちの間ではこの地に対して憧憬の念を抱いていた。実際、ジャン・ド・レリーらヨーロッパで宗教的迫害を受けた人物の多くが新天地として赴いたのである。モンテーニュもそのような新大陸に憧憬を持っていた知識人の1人であり、食人族として知られたブラジルのトゥピナンバ族の男とルーアンで面会したこともある⁵⁾。モンテーニュのなかでもそうした彼の異国趣味が最も強く表されているものが「食人族について」である。モンテーニュはプラトンのユートピアの世界観を引き合いに出しながら、新大陸の住人たち (cannibales) を次のように称賛する。

Or je trouve, pour revenir à mon propos, qu'il n'y a rien de barbare et de sauvage en cette nation, à ce qu'on m'en a rapporté: sinon que chacun appelle barbarie ce qui n'est pas de son usage. Comme de vray, nous n'avons autre mire de la verité, et de la raison, que l'exaemple et idée des opinions et usances du país où nous sommes. Là est tousjours la

parfaicte religion, la parfaicte police, parfaict et accomply usage de toutes choses⁶⁾.

このようにモンテーニュにとって cannibales の地はユートピアなのであり、自分自身は踏み込んだことがない新大陸を理想化して述べるのである。とはいえ別の箇所では捕虜を殺して皆で食べる習慣について言及もしており、彼らが野蛮とは無縁の生活を送っているとは主張していない。しかし我々の方がはるかに野蛮なのだから、彼らを野蛮だと罵る資格は我々にはないとモンテーニュは主張するのである。

Nous les pouvons donc bien appeler barbares, eu esgard aux regles de la raison, mais non pas eu esgard à nous, qui les surpassons en toute sorte de barbarie⁷⁾.

当時のフランスは聖バルテルミーの虐殺が象徴するように旧教徒と新教徒との衝突により、数々の蛮行が繰り返られ荒廃していた。彼は食人族を引き合いに出しながら、旧世界の蛮行を想起させ、その野蛮性を告発するのである⁸⁾。

モンテーニュのこのエッセーのなかで現代に生きる我々に鋭く投げかけるのは次の部分であろう。

Je pense qu'il y a plus de barbarie à manger un homme vivant, qu'à le monger mort, à deschirer par tourmens et par gehennes, un corps encore plein de sentiment, le faire rostir par le menu, le faire mordre et meurtrir aux chiens, et aux pourceaux (comme nous l'avons non seulement leu, mais veu de fresche memoire, non entre des ennemis anciens, mais entre des voisins et concitoyens, et qui pis est, sous pretexte de pieté et de religion) que de le rostir et manger après qu'il est trespasé⁹⁾.

このような「生きている人を食べる」というモンテニューの表現に類似したものは比較的最近書かれた書物などでもよく見受けられる。例えば船瀬学は、映画『エイリアン』について論じているところで、次のようなことを述べている。

「生きたまま」「餌」にするというのは、ある意味では人類が「奴隷制度」として確立したものに似ている。人間を生きたまま食べ物にする制度である。人間的な感覚を麻痺させるコツを覚えた「支配者たち」が、「奴隷」を生きたまま食いつくしていく歴史が人間にもあった¹⁰⁾。

『エイリアン』に登場するエイリアン（異星生物）は人間の体に卵を植え付ける。卵は人間の体を食べながら成長し、ついには寄生主の胸を突き破って登場する。このようなエイリアンの習性は地球上に存在するジガバチを模したものにすぎないのであるが、船瀬はそれにリアリティが感じられるとしたら、生きたまま人を食べることが現実になりうることを予感するものだからではないかと提起するのである。また現代社会においては医療の発達により輸血や臓器移植のように、生きたまま体の一部を取り出したり、交換したりする機会が実際に増えていっている¹¹⁾。そうしたことを顧みれば「(人間が) 生きた人間を食べる」ということに対するモンテニューの非難は、彼の時代よりも現代社会に生きる我々の生活に対して、より鋭く突き刺すものであるといえるだろう。

一方デオダートの『食人族』もモンロー教授の最後のセリフが集約するように、モンテニューと同様に異郷の地に住む食人族を引き合いに出しての西洋批判が織り込まれている。しかしながらデオダートはモンテニューのように未開社会を極端に理想化するようなことはしない。そこでは姦通の罪を犯したと思われる女性を処刑したり、生まれたばかりの赤ん坊を生き埋めにしたうえ産んだ母親も撲殺したりするのである。しかしながら彼らに対峙するアメリカ人はそれ以上に残忍な振る舞いをす

る。イエーツらは自分が取りたい映像を作るためならどんなことでも行い、自らも殺人やレイプを快樂として味わうのである。モンテーニュは文明社会と未開社会を比較するという方法と取っているが、この映画はそれに加えて、西欧人が異世界に赴いて行っている蛮行も告発するのである。例えばこれを2003年に起きたイラク戦争以後のイラクの縮図として見てとることも可能であろう。殺人やレイプなどはアメリカでは珍しいことではないが、イラクでも記憶の新しいところでは2006年にマハムディアで起きた少女暴行殺人事件のようなことが米兵によって引き起こされている¹²⁾。『食人族』はイラク戦争よりも20年以上前に作られたものであるが、こうした現実を投射するものとしても機能するのである。またデオダートもアマゾンでは映画以上の蛮行が白人によって日常的に行われていると指摘している。彼はこの映画を批判するメディアから殺人者という中傷を受けてきた。しかし彼の方は、自分たちは人を殺していないが本当に先住民を殺している人たちがいることを主張する。彼によれば『食人族』にガイド役で出演している人物は先住民サファリを観光客にやらせていた。これは動物を狩るように、狩りをしている先住民をハンティングするというものである。デオダートはこの人物を告発し、その人物は逮捕されたが結局保釈されたとのことである。また撮影の場所として使われたレティシアの町では先住民にドラッグを運ばせて殺すということが頻発しているし、先住民を殺して臓器を売買するということが現実に行われている、そうしたものは恐ろしくて映像化することはできなかった、ともデオダートは語っている。つまり映画はフィクションだが、映画以上に野蛮な行為は現実で繰り返し広げられているのだと彼は主張するのである。

このように反骨的な姿勢を示すデオダートが最も批判の矛先を向けるのはマスメディアに対してである。映画『食人族』はその興行的成功と引き換えにマスメディアから多くの非難を受けた。問題になったのはその残酷描写に関してであるが、中には人種差別的だという批判もあった。それに対してデオダートは「ショッキングなスクープをするニュース記

者のほうこそもっと非難されるべきだ」と返す刀で切り捨てる。こうした彼のマスメディアに対する反発は映画の中にもすでに表されている。『食人族』に登場するテレビ局はアラン・イエーツらの撮った映像がやらせであることを知りながら放映を続け、さらに彼らが残した最後のフィルムも、モンロー教授の反対を押し切って、編集して放送しようとする。当然イエーツらの常軌を逸した行動は削除して、未開人の恐るべき野蛮な習俗というのを強調したものにして放送しようとするのである（結局あまりにもひど過ぎる内容だったのでフィルムの処分が決まり、テレビでの放送は見合わされることとなったのであるが）。

またこの映画には本物のドキュメンタリー映像が作品中に織り交ぜられている。それは映画中ではイエーツらによるやらせとして紹介されている人々が銃殺される映像であり、これは著作権使用料を払って二次使用しているものである。つまりあたかも本当のように見せかけているのが作りものであり、やらせとされているものが本物の映像なのである。デオダートたちは食人風習を持った民族など実際に見たことはないし、映画を撮るために殺人をしたわけではない。少なくとも彼はそう述べている。しかしその一方でやらせとされている残酷映像は、本当に人が殺されているところを映した映像である。『食人族』のこうしたフェイク・ドキュメンタリーという様式、真実と虚構を錯綜させた内容はドキュメンタリーをパロディ化したものであるが、それはドキュメンタリー自体が抱える問題の本質を浮かび上がらせるものなのである。

2. 動物と人間

『食人族』は本国イタリアでは上映中止にもなり、デオダートらは告発され裁判にかけられた。しかしながらその理由はカニバリズムが描かれていることでも、実際に殺人を行っているという疑惑がもたれたからでもない。動物を殺す場面があまりに残酷だということからである。映画中では亀やサルなど多くの動物が殺されるが、デオダートは実際にそれらの動物を殺したことを認めている¹³⁾。しかし彼は撮影後きちんと食べ

たので、無駄な殺生は行っていないと主張するのである。ここで注意が必要なのは、映画中で（我々から見れば）残酷なやり方で殺して食べるのは、「緑の地獄」の住人だけではなく、それを取材するアメリカ人も行っているところである。それも残虐非道な行為を繰り返すアラン・イエーツの一行だけでなく、モンロー教授の一行も同様の行為をしているのである。つまり「緑の地獄」の住人もアメリカ人も生きるために必要な栄養を補給しているのであり、こうしたことは当然のことながらどのような社会でも行われていることである。我々は牛や豚を食べているのに、なぜこの映画が残酷なのかとデオダートは逆に問いかけるのである。また我々の生きる現代社会においては栄養補給のためだけでなく、様々な理由で動物が大量に殺されている。例えば鳥インフルエンザ、SARS、狂犬病などといった感染症に関連して多くの動物がこれまで殺処分されている。人類学の立場からパンデミックを研究しているフレデリック・ケックは狂牛病に関連しての牛の殺処分に対して次のように述べている。

狂牛病以降わたしたちは、感染が人間に広がるのは動物のせいではなく、人間が動物を変容させてきたからだと理解し始めている。（…）近代の歴史においてはじめて、人間の健康を守るために大量の動物が処分されたという意味でも、狂牛病は模範的な事例である。この病による人間の犠牲が数百人であるのに対して、牛は何百万頭も殺されている。1990年代のヨーロッパの狂牛病危機は、公衆衛生の新しい合理性を生み出す独創的な供犠だったのではないかと考えたくなる¹⁴⁾。

ケックが述べるように、こうした動物の大量の殺処分は、見方によれば、極めて不可解で残酷な儀式でしかないであろう。このように我々は多くの動物の殺害に関わりを持つにもかかわらず、なぜこの映画を見て残酷だとして不快に感じるのか。それは我々が深く関わっていながらも、隠匿されて見ることのない現実を我々に呼び起こすものだからではない

だろうか。動物の虐殺は普段から我々が深く関わっていながらも、その死に直接関わることを忌避する。それによって我々が動物の犠牲にほとんど感情を揺さぶらせることはなくなるのである。『食人族』の本当の恐ろしさはそうした我々の生活の見えない部分を感じ取らせてしまうところにあるのではないだろうか。

3. 人を喰った人類学者

映画『食人族』が公開されたほぼ同時期、人類学者の間ではカニバリズムをめぐる大論争が起きていた。1979年にアメリカの人類学者ウィリアム・アレンズの著書『人喰いの神話』がスキャンダラスとっていいほどの反響を与えたのである¹⁵⁾。アレンズはこれまでに報告されてきたカニバリズムの存在性に異議を唱えた。彼は自分がこれまで調べてきたカニバリズムに関する記録は満足のいく直接的な証拠は一つも見つからなかったと主張する。とりわけ彼が問題にするのは、我々は異質な他者に対して確かな根拠もなしにカニバリズムの慣習があると信じてしまうことである。また彼はそこに潜むステレオタイプな偏見や二重基準を指摘する。二重基準というのは、同じ食人についての報告でも行為者がヨーロッパ人である場合は都合よく排除され、非ヨーロッパ人の場合は無条件で受け入れるというものである。このような立場に立てば、モンテニューのように一見すると新大陸の住人を賞賛しているような文章も、ヨーロッパ人の偏見に基づいて作り上げられた神話として批判の対象となるのである。アレンズの著書は大きな反響を呼び、一時期落ち込んでいたカニバリズムへの学術的関心が再び呼び覚まされることとなった。しかしその一方で彼に対する批判も大きかった。反論の多くはアレンズの文献調査は恣意的であり、カニバリズムがこれまでに行われてきたことは明らかである、といったものである。中には食人の風習はまぎれもない事実なのにそれを認めない修正主義はホロコーストの否認に結びつくものだとする意見すらある¹⁶⁾。とはいえアレンズも飢餓などの特殊な状況下におけるカニバリズムは否定していないし、カニバリズム

が行われていた可能性自体を否定しているわけではない。この論争についてはマーティン・ガードナーが詳しく紹介しているが¹⁷⁾、そこにはアレンドの著書が自分たちのこれまでの成果を踏みにじる内容である上に商業的成功を収めたということに対する感情的な反発も多分に含まれていたのである。アレンドと親交がある山口昌男は『人喰いの神話』のあとがきの中でアレンドが受けたいやがらせについて述べている。山口によればアレンドと同じ勤務先（ニューヨーク州立大学）で同じ学科のポーラ・ブラウンという教授が、彼に反感を持ち、彼の教授昇格を妨害するなどのいやがらせを行っていたという。こうしたブラウンの振る舞いに対し、山口は「彼女の方が人喰いのように思われる」と皮肉をこめて述べている¹⁸⁾。しかし一方でアレンドの見解に対して概ねは支持する立場の側からも、彼の見解や姿勢に対して批判する者もいる。例えば吉田集而はアレンドの見解が的を射たものだとしながらも次のようにアレンドの限界を指摘している。

私は、こうした批判をして見せたアレンド自身もやはり、アメリカ文化を背負った人類学者であると思う。ヨーロッパやアメリカでは、食人は聞くもおぞましい行為と考える心情が特に強いのではないだろうか。そこには、自然と文化を対立させ、人間と動物を鋭く分断する思考が、根底にあるように思われる¹⁹⁾。

また小田亮はアレンドが遺灰を食べる習慣を食人と決めつけ、それを躍起になって否定しようとする姿を西洋中心主義的思考の表れと見ている²⁰⁾。実際、肉親の遺骨を食べるという習慣は日本でも一般的ではないにせよ社会的了解を得た行為として存在する。こうした行為は墓や仏壇を作る、ないし遺骨や遺品に特別な愛着を持つ、といった我々にとってごくありふれた行為や感情の延長線上にあるものである。それを安易にカニバリズムや食人という言葉に翻訳し、佐川一政やハンニバル・レクターのような殺人者の行為と混同されることに違和感を覚える人がいた

としても、それは無理からぬことであろう。こうした「残酷極まりないカニバリズムなど行うはずがない」という思い込みこそ西洋中心主義的だとする吉田や小田らと同様の批判をクロード・レヴィ＝ストロースもアレンズに対して投げかけている。そのうえで彼は次のように述べている。

カニバリズムという事象を、その外延のすべてにおいて理解するよう試みてみよう。時代や場所に応じてなみはずれて多様な様式と目的はあっても、問題になっているのはつねに、他人の身体に由来する部分や物質を、自分の意思によって、人間の体の中に導き入れるということである。このようにして悪魔祓いを済ませてみれば、かなりありふれたものでしかない²¹⁾。

レヴィ＝ストロースは血液製剤による HIV の感染と食人風習が原因とされているクールーという病気を関連づけながら、カニバリズムが現代の我々の住む社会で行われていたとしても何らおかしいことではないと指摘するのである。また食人言説の分析に近年最も精力的に取り組んでいる研究者の一人であるガナナート・オーバーセーカラは食人言説の対話性や幻想が現実に転化する性質を強調し、そうしたことへの認識がアレンズには欠けていると指摘している。オーバーセーカラはとりわけポリネシアでの食人言説をライフワークとしているが、彼はポリネシア人の側もヨーロッパ人に対して人食いの嫌疑を抱いていたことや支配に対する抵抗の手段として食人の恐怖を逆利用していたことを推論している。またヨーロッパ人がもたらした殺人道具による環境の変化・戦争による死体の増加がそれまでの彼らが固有に持っていた供犠とは異なる、人肉食の慣習を生みだした可能性も指摘する。彼はそのような考察を通して食人言説の相補性を見て取るのである²²⁾。

映画『食人族』も以上のような近年のカニバリズムをめぐるの学問上の研究や論争と深い相関関係を持っている。この映画はドキュメンタ

リーを装ってはいるが、この作品を撮るために実際に殺人やカニバリズムを行ってはいないということはすでに確認している通りである。またこの映画に登場する「緑の地獄」の住人役は実際にアマゾンで暮らす先住民族が演じているが、彼らに食人風習があるわけではない。しかし作品内で食人族が存在するのか、カニバリズムが行われているかということに注意深く観察すると複雑な問題が孕んでいるということが分かる。この作品は殺人などの暴力的な描写には満ちてはいるが、そのタイトルに反してカニバリズムらしき行為を行っている場面は非常に少ない。そうした中で「緑の地獄」の住人で食人習俗を持っていると確証を持って言えそうなのはイエーツらを惨殺した木族だけである。カニバリズムらしきものを描いている個所で最も有名なのは映画のクライマックスであろう。イエーツらは殺害され、彼らの体は無残に解体され、料理されるのである。しかしここでは中盤で描かれる木族と敵対する沼族の捕虜の生贄を食べる場面に注目することにする。それはモンロー教授がイエーツらの死の原因を探り出そうとすることで描かれている。彼はテープレコーダーで録音していた儀式の音声を木族の者たちに聞かせて、自分が他者の力を奪い取る魔術をもつ人食いのようなものと思わせて接近する。モンロー教授の思惑通りに、彼は儀式（食事）に招待される。そして人間の生の臓器を差し出されて彼は戸惑うものの、同行者に促されてあっさりと口にしてしまうのである。その部分を見れば木族の人たちには食人の習慣があるようにも思われるかもしれないが、それは彼らが元々持っていた習慣ではないかもしれない。つまりそれは日常的な習慣ではなく、飢餓や戦争などの特殊な条件が揃うことによって成立するものであって、例えば第二次世界大戦中に日本兵が人肉を食べたというような類のものかもしれないのである。そして木族の側も奇妙な道具（テープレコーダーや撮影器具）を用いて自分たちを取り込もうとする異人たち（モンロー教授やイエーツら）を人喰いのようなものとして認識していたのである。少なくともこの作品で描かれているカニバリズムだけで判断すれば、それはアメリカ人と「緑の地獄」の住人との相補的な関係性に

において生じたものだと言えよう。こうした中でとりわけ注目に値するのがモンロー教授の態度である。『食人族』は学問上の論争を嘲弄するかのようになり、人類学者をカニバリズムの当事者にさせ、且つその彼をモンテーニュの如きに批評する人物として描いている。彼は人間の臓器を食べた後もそのことに対して後ろめたさを見せることは特になく、その関心は相変わらずイエーツらが犯した罪に注がれる。ニューヨークに戻った彼は遺族を執拗に追いまわして取材したり、フィルムを視聴したりしながら、イエーツらの行為やテレビ局の不誠実さに憤慨するのである。彼には人を食べてしまえば人ではなくなるというような道徳観はなく、自分自身が人喰いだとも全く意識しないのである。すでに述べたように映画の最後でモンロー教授は「本物の人喰いは誰なのだろうか」とつぶやくのであるが、彼こそ二重の意味で人を喰った人類学者であろう。このように主人公である人類学者をデフォルメして描くことで、この映画は学問上の議論や学者の姿勢すら相対化するのである。

おわりに

映画『食人族』は単に強烈な視覚的効果を持っているだけの作品ではなく、食人言説という観点から見れば、そこに豊饒な批評性を認識することができる。この作品は「カニバル・人喰い」という記号を用いながら我々の他者感や現代社会の実態を告発し、我々がそれに対して新たな見方を生み出す契機を与えるものとなっている。すなわちこの作品はモンテーニュの映画版といえるものであるが、我々に投げかける批判の鋭さという点においてはモンテーニュよりも一歩抜きん出たものとなっている。そこでは近年のカニバリズムをめぐる研究や論争で取り扱われる問題や現代に潜む社会問題などより密着した相関関係が成されているのである。

(博士課程後期課程)

(注)

- 1) ちなみにこの映画はイタリア映画であるが、デオダートは本国イタリアでも英語の音声とイタリア語字幕で上映されたかったそうである。結局、彼の意向に反してイタリア語の音声で上映されたが、いずれにせよ彼にとってこの映画のオリジナル言語は英語なのである（DVD版『食人族』のデオダートのコメンタリーより。これ以外のデオダートによる情報や彼の意見も基本的にDVDの彼のコメンタリーに負っている）。
- 2) 例えば、映画雑誌『キネマ旬報』の1983年度のベスト100に『食人族』はランクインしていない。
- 3) フェイク・ドキュメンタリーとはあたかもドキュメンタリーのように見せかけた劇作品のことで、モキュメンタリーとも呼ばれる。グラインドハウスはダウタウンにある映画館のことで、そこではバイオレンスと性描写をふんだんに取り入れた低予算のインディーズ映画が数本まとめて上映されていた（『グラインドハウス映画入門』、洋泉社、2007を見よ）。また大手レビューサイトのIGNでの「グラインドハウス映画ベスト10」という記事でも『食人族』は8位にランクインしている（<http://movies.ign.com/articles/778/778253p1.html>）。
- 4) 本橋哲也『ポストコロニアリズム』岩波書店、2005、p.38.
- 5) トゥピナンバ族がポルトガルの司祭を食べて、自分たちの内に取り込んだという逸話は有名で、その出来事から374年後の1928年にブラジルの詩人オズヴァルド・ヂ・アンドラーヂは『食人宣言』（*Manifesto Antropófago*）なるマニフェストを発表した。食人を自分たちのアイデンティティとして位置付けた彼は、トゥピナンバ族がポルトガルの司祭を食べた瞬間をブラジルが誕生した時と定めたのである（Oswald de Andrade, *Manifesto Antropófago*, <http://www.lumiarte.com/luardeoutono/oswald/manifantropof.html>）。
- 6) Montaigne, *Les Essais*, Gallimard, 2007, p.211.
- 7) *Ibid.*, p.216.
- 8) ただしモンテーニュの「食人族について」の食人族についての記述やその考察の多くは『エッセー』の翻訳者の宮下志朗も注で示しているように、ジャン・ド・レリーの『ブラジル旅行記』15章「アメリカ人は戦争捕虜をいかに遇するか、また彼らを殺して食う際に行われる儀式について」の受け売りである。新教徒であったレリーは迫害から逃れるために一時期ブラジルで生活した。そのような経緯を持ち大虐殺の恐怖と隣り合わせに生きたに彼にとっては新大陸で行われている食人の儀式よりもヨーロッパで行われている蛮行の方がはるかに野蛮で恐ろしい行為なのである。（二宮敬ほか訳『大航海時代叢書 フランスとアメリカ大陸2』岩

波書店、1982)。

- 9) *Ibid*, p.216. また死んだものを食べるのと生きながら食うのとどちらが残酷なのかという問いかけは先にあげたジャン・ド・レリーの作品にも見られる。
- 10) 船瀬学『「食べる」思想』洋泉社、2010、p.157.
- 11) 人体の資源化や商品化を論じたものは数多くあるが、その入門的な書物としてとりわけ優れているものを一つ上げるとすれば栗田剛『人体部品ビジネス』講談社、1999であろう。栗田は実際に臓器売買の事情について取材するなどの実証を重視しながらも、様々な立場を尊重しながらこの問題を多面的に論じている。またこの中で「ネオ・カニバリズム」という用語を使い、我々が将来的により洗練された形で人体を栄養補給のために摂取するようになる可能性を論じてもいる。
- 12) 4人のアメリカ兵が14歳の現地の少女を強姦したうえに、口封じのために本人やその家族を惨殺した事件。2007年に公開されたブライアン・デ・パルマ監督の映画『リダクテッド 真実の価値』はこの事件を描いたものである。
- 13) ちなみに後に動物虐殺の場면을削除した動物愛護版も作られている。
- 14) フレデリック・ケック (山崎吾郎訳) 「レヴィ=ストロースと鳥インフルエンザ」『思想』2010年1月号、岩波書店、p.242.
- 15) ウィリアム・アレンズ (折島正司訳) 『人喰いの神話』、岩波書店、1982 (1979)
- 16) モネスティエ、マルタン (大塚宏子訳) 『食人全書』原書房、2001及びピエール・ヴィダル・ナケ (石田靖男訳) 『記憶の暗殺者』人文書院、1995を見よ。
- 17) マーティン・ガードナー (太田次郎監訳) 『インチキ科学の解毒法』光文社、2004
- 18) アレンズ op.cit の解説。
- 19) 吉田集而『不死身のナイティ』平凡社、1988、p.66.
- 20) 小田亮「翻訳としての文化」現象学・解釈学研究会『理性と暴力』、世界書院、1997
- 21) レヴィ=ストロース、クロード (泉克典訳) 「われらみな食人種」『思想』、岩波書店、2008
- 22) Obeyesekere, Gananath, *Cannibal Talk*, University of California Press, 2005